

編 集 後 記

編集委員となって約4年が経過し、4回目の編集後記を書くことになった。今回は原著論文についてその意義、研究デザインをしっかりと立てることの重要性などを述べさせていただいた。4回目ともなると文才のない筆者にとってはそろそろ材料がなくなってきた。今回は論文の意義などを思いつくままに述べていただくといい。

学術集会での発表は自分の知識を深めるとともに、参加した先生方と意見の交換ができる点で大きな意味がある。しかし、どんな立派な発表内容も時間がたつにつれて徐々に記憶からなくなり、残るのは概略が述べられた抄録だけである。現在は種々の資格を得るために一定数の論文が必要な時代である。しかし、論文を書く本来の意義は日々の臨床、疾患の病態解明に役立つ発表を残すことであり、論文を書くことはその内容の「質」を向上させ、論文が媒体として残ることは多くの人が利用できることから世の中の役に立つ。

最近の本学会誌に投稿される論文を読ませていただくと、以前に比べて論旨が明瞭、文献検索や集計の方法が明確となっているなど体裁の整った論文が増えてきたように思われる。論文は自分以外の多くの読者に「自分の主張を明確に伝える」ことが必要であり、そのためには「できるだけ不要な部分を削除してスリムな文章を作る」ことが重要である。私の恩師の先生から言われ続けてきた内容である。

論文は背景、目的、方法、結果、考察によって成り立ち、重要なのは「適正な方法に基づいた結果」である。結果がしっかりしていれば、長い考察は必要ではなく、簡潔にそれらに対する考えを述べればよいと考える。考察よりは結果に力が注がれるべきである。

編集後記を書いていていつも思うことは、自分で述べている内容の対象者は先生方だけでなく、必ず自分自身が含まれていることである。まだまだ若輩者の筆者は先生方と一緒に更なる可能性をめざして仕事を続けたいと思っている。学会事務局で裏方として働いてくれている職員の方々とともに先生方の投稿論文をお待ちしている。